

三保忠夫『鷹書の研究 宮内庁書陵部蔵本を中心に』  
(上下冊) (和泉書院、2016年)

兼平, 賢治  
東海大学文学部歴史学科 : 講師

<https://doi.org/10.15017/1807791>

---

出版情報 : 鷹・鷹場・環境研究. 1, pp.63-65, 2017-03-25. 九州大学基幹教育院  
バージョン :  
権利関係 :



<紹介>

# 三保忠夫『鷹書の研究 宮内庁書陵部蔵本を中心に』（上下冊）

（和泉書院、2016年）

兼平 賢治

KANEHIRA, Kenji

本書（上下2分冊）は、三保忠夫氏が2000年5月以来、宮内庁書陵部図書寮文庫の鷹書群を悉皆調査してきた成果である。日本語学を専門とする三保氏と鷹書群との出会いは、日本語助数詞の研究に携わっていた際に、同じ鳥類であっても、特に鷹については、多彩な数量表現があることに注目したことであり、それは鷹狩の特殊性に拠るものであるという。本書の構成は以下の通り。

まえがき

第1部 宮内庁書陵部所蔵の鷹書—総論—

第2部 宮内庁書陵部所蔵の鷹書

第1章 公家に関わる鷹書

第2章 中世武家に関わる鷹書

第3章 公儀鷹匠・鷹匠同心などに関わる鷹書

（以上、上冊収録）

第4章 松江藩鷹方関係者に関わる鷹書

第5章 徳川将軍家・幕臣、

諸侯・諸藩鷹匠などに関わる鷹書

第6章 絵師・僧侶などに関わる鷹書

第7章 有職故実家、国学者・文人、

連歌師などに関わる鷹書

第8章 李氏朝鮮の王族、医学者に関わる鷹書

第9章 未詳の人物に関わる鷹書

第3部 鷹詞の研究

第1章 鷹狩言葉の諸相

第2章 鷹詞の研究資料（翻刻）

第3章 宮内庁書陵部蔵『鷹詞

江戸ト出雲之相違書上』（翻刻・注釈）

（以上、下冊収録）

「まえがき」では、鷹狩と鷹書について概括的に論じ、また、従来の研究の問題点についても言及する。そうしたなかで、本書の特徴でもある鷹書の整理方法として採用されたのが、「鷹書を手にした人々」を重視するものである。三保氏はこの視点から鷹書を検討、整理しているが、それぞれの立場を尊重し、時間的経緯や社会制度、身分・職務などの面から、第2部の章立てになったとする。本書の主要部を第2部とする所以である。

第1部は、総論に位置付けられており、本書が扱う鷹書のなかでも、宮内庁書陵部所蔵の鷹書737点のうち、その主体となる松江藩松平家から寄贈された636点について、寄贈の経緯や松江藩における鷹書収集事業とその背景について論じる。

松平家寄贈による鷹書は、昭和3年（1928）12月、松江藩10代藩主松平定安の三男直亮氏（貴族院議員）から、当時の宮内省図書寮に寄贈されたものであり、このほかに、東京国立博物館や島根県立図書館にも、同じく寄贈された鷹書類が所蔵されているという。

松江藩松平家による鷹書の収集は、年月の経過と共に蓄積されたものではなく、短期間のうちに

明確な意図、目的をもって積極的に蒐集されたとする。その蒐集を行ったのが、9代藩主松平斉貴（なりたけ、嘉永6年〔1853〕に39歳で致仕した後は斉斎〔なりよし〕、1815～1863、享年49）であった。斉貴のもとで実際に鷹書の収集、制作にあたったのは、側近たちや藩の右筆、儒医、絵師、鷹方、「物書手伝」、「御隠居様附物書」などであり、それは藩の枠を越えて、公儀御鷹部屋との関係や歴代藩主の人脈にも拠ったとし、三保氏は、「松江藩放鷹文化圏」がこうしたスタッフによって構成されていたと指摘する。収集先も、藩内はもとより、公儀の鷹匠・鷹匠同心、諸侯、連歌師、絵師、国学者など多方面にわたったという。

斉貴は放鷹を好み、また、好学の藩主でもあった。なかでも和学を貴び、父で8代藩主の斉恒から『延喜式』の校訂事業を引き継ぐなどしている。そうした和学のひとつである鷹道（「日本放鷹文化」）について、斉貴は、鷹術・礼法、有職故実など、多種多様な鷹書を可能な限り収集し、これを整理して校訂し、叢書などにする企画を懐いていたのではないかと指摘する。またそこに、将軍徳川家斉の影響を推測するとともに、祖父で7代藩主である治郷から関係を深めていた和学講談所の事業や指導を得ていた塙保己一の影響も指摘する。

ところで、本書で紹介されている鷹書に限らず、大名によるある分野に特化した史料の収集例はみられる。そのなかでも、臼杵藩の城絵図群について検討した白峰旬氏の研究によると、江戸時代を通していくつかの画期により積層的（多年次的）に作成・収集されたとするが、管理のあり方からは江戸時代後期に絵図群として管理が本格化するという。また、江戸で藩主が軍学の講義を受けるときにまとまった数の縄張図や城絵図が必要となったが、その需要に応える存在として、絵師のほかに、城絵図を大量にまとめて各大家に売り込むブローカーの存在を推測している<sup>1</sup>。松江藩松平家による鷹書収集の事例との相違点は興味深く、また、需要があれば供給する側に多様な存

在を想定できる。紹介者兼平も、盛岡藩の家老遠野南部家による全国各地の城絵図の収集を紹介したことがあるが<sup>2</sup>、今後、こうした観点からの事例の蓄積と分析に期待したい。

第2部は、本書の主要部であり、膨大な鷹書について、章立てのように分類した上で、その鷹書に関わる人物の来歴を示し、その後、それぞれに詳細な書誌情報を記す。宮内庁書陵部所蔵本だけではなく、大学や自治体の図書館、研究施設などに所蔵されている鷹書についても取り上げて、逐一写本や類書の内容とも比較し、関係性を明らかにする。謄写させてもらった相手先や書き込み、蔵書印などからも鷹書の伝来について解説が加えられており興味深い。また、近世後期の写本が多くみられるが、江戸時代を通して写本がつけられていた点には注目したい。

第1章は、公家に関わる鷹書を取り上げ紹介するが、鷹書の撰者が誰であるのかという問題については、その重要性を指摘し、考察も加えられているが、本書においては、撰者を究明することに主眼を置いていない点に注意したい。むしろ、二条基房や藤原定家などといった著名な歌人や文化人を撰者とする鷹書について、それが真の撰者ではなく、「仮託」されたものだとしても、そこに放鷹文化史上において重要な意味があると指摘する。「鷹百首」「鷹三百首」などは、鷹歌に馴染みのない人々のために編まれた手引書・作法書であるが、こうした著作物の性格こそが仮託を必要としたとする。すなわち「著名歌人の名を冠し、高級ブランド化する必要があった」と指摘する。

第3章では公儀鷹匠・鷹匠同心など（三卿におけるを含む）に関わる鷹書<sup>3</sup>、第4章では松江藩鷹方関係者に関わる鷹書を紹介する。紹介者兼平は、慶長～慶安期（1596～1652）にかけて松前藩と東北諸藩に派遣されていた公儀鷹師衆と諸藩の鷹師について関心を寄せているが<sup>4</sup>、なかでも諸藩の鷹師がどのように鷹に関する知識を蓄積していたのか、この点について興味をもつ。本書によると、近世後期の例になるが、松江藩の鷹

方は公儀御鷹部屋に弟子入りし、江戸で鷹術の訓練を受けている。松江藩鷹方関係者が関わる鷹書は、そこから知識を得るというだけではなく、実践の場でも活用されていたことが知られよう。

ちなみに、諸藩の鷹師が公儀鷹匠に弟子入りする関係は、近世前期からみられるものだろう。盛岡藩では、3代藩主南部重直（1606～1664）が数名、鷹匠を召抱えているが、そのなかには「数年於江戸従公義御鷹匠稽古被仰付」（「系胤譜考」<sup>5</sup>杉村六左衛門）、「命ニ依テ公義御鷹匠加藤牛之助ノ門ニ入テ鷹法ヲ学フ」（「参考諸家系図」<sup>6</sup>佐々木惣十郎）などとみえる。鷹を好んだ松江藩初代藩主松平直政は、慶安～明暦期（1648～1658）にしばしば盛岡藩へ鷹匠を派遣しているが<sup>7</sup>、こうしたことから、松江藩と公儀鷹匠の関係は古くに遡ることが推測できようか<sup>8</sup>。

第3部は、鷹詞（たかのことば）の変遷について論じる。古代には、すでに鷹狩の用語としての言葉が多く確認されるが、平安時代から中世には、鷹狩に材を借りた鷹歌も多くなり、鷹狩の言葉に注目が集まるようになって、考証が重ねられたという。鷹狩言葉の秘説・秘伝が重視されて、秘伝書や家伝書が相承されるようにもなった。そして、近世になると歌語としての価値、文学的意義の認められる「鷹詞」（狭義）が尊重されたが、鷹狩の言葉全般も「鷹詞」（広義）と称されるようになったと指摘する。

第2章と第3章は、鷹詞に関する史料を翻刻し考察するが、史料にみられる鷹詞について詳細な解説も加えられており、辞書替わりに重宝しよう。

なお、巻末には、書名索引と人名索引、事項索引が付されており、本書を縦横に活用するのを助けてくれる。

以上に本書の概要を述べてきたが、本書の最大の特徴であり、圧巻なのは、その鷹書の書誌情報の豊富さである。もちろん、膨大な鷹書を扱っているが故に、考察には浅深の度合に差がみられる。しかし、それらも含め、これから鷹書の研究をより深化させるために、座右の書となることは間違

いない。膨大な情報から何を見出し、どう活用するかは、読者に与えられた課題であろう。なにより、歴史学においては中世史の研究者を中心に進められてきた近年の鷹書の研究であるが、本書から得られる情報は、近世史の研究者にとって、鷹書に限らず、鷹を扱う研究全般に有益な情報が多く、研究を新たな段階に導くものになると確信する。

（2016年2月刊、2256頁、30,240円〔税込〕）

〔謝辞〕本研究は、JSPS 科研費 16H01946 の研究助成を受けたものです。

## 註

- 1 白峰旬「豊後白杵藩旧蔵の城絵図群に関する一考察—『白杵市所蔵絵図資料群調査報告書』の内容検討より—」『別府大学紀要』49、2008年。
- 2 拙稿「遠野南部家所蔵の近世絵図類について」『南部光徹氏所蔵「遠野南部家文書」の調査・研究』（研究代表 斎藤利男、科研費研究成果報告書、2010年）
- 3 なかには、近世後期から幕末の公儀御鷹部屋の日記である『御用向諸事日記』24冊（国立国会図書館所蔵）も含まれている（第2部第3章第22節）。また、第2部第3章第27節では、『御鷹御用日記』6冊（合冊されて2冊、国立国会図書館所蔵）にも言及する。
- 4 拙稿「公儀御鷹師衆・諸藩鷹師からみる一七世紀の東北—盛岡藩を中心に—」『東北近世史』39、東北近世史研究会、2015年。
- 5 もりおか歴史文化館所蔵。
- 6 岩手県立図書館所蔵。
- 7 「雑書」（もりおか歴史文化館所蔵）。
- 8 松平直政期の鷹書と鷹匠の召抱えについては、三保サト子・三保忠夫「松江藩松平直政時代の鷹書と鷹匠—宮内庁書陵部所蔵の鷹書・鷹詞の研究—」（『島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要』50、2012年）参照。